慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人口希薄国の労働余剰 : 黒アフリカの事例
Sub Title	Surplus labour in sparsely populated countries : black African case
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.3 (1979. 6) ,p.273(1)- 289(17)
JaLC DOI	10.14991/001.19790601-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人口希薄国の労働余剰——黒アフリカの事例

矢内原　勝

Ⅰ　設　問
Ⅱ　労働の余剰
　(1)　農閑期の利用
　(2)　性別分業
　(3)　目標産出量
Ⅲ　土地不足
　(1)　人口圧力の増大
　(2)　土地不足の対応策
　　a.　耕地の移動
　　b.　労働投入量の増加
　　c.　農業技術の変更
　　d.　外部よりの食糧購入
　　e.　出稼ぎ
Ⅳ　農民の選択

Ⅰ　設　問

一般にサハラ以南の黒アフリカは，人口圧力のまだ小さい地域とみなされている。人口圧力が小さいということは，主要産業である農業の生産要素を土地と労働と仮定すれば，産出量の増大に対する制約は労働にあるはずである。ところが過去の植民地統治下に，アフリカ諸国が輸出経済構造を急速に形成した要因として，未利用の土地と労働が輸出用生産物の生産活動に継続的に投入され，自給用の食糧生産がこのために犠牲にされずにすんだ事実が指摘されている。(1) また今日都市内に失業が増大しているにもかかわらず，農村から労働力が都市に流入して止まないのも事実である。

人口希薄国でなぜ過去に，新たに開始された輸出用生産物の生産に労働が供給され続けたか，また現在，都市に不熟練労働が流入し続けるかという問題に対して，黒アフリカの現実に即して，いくらかの解答を引き出そうということが本稿の目的である。

注(1)　輸出経済形成について「余剰捌け口論」展開している Hla Myint は，比較的人口希薄で，まだ人口圧力に悩まされていない低開発諸国として，エジプトを除くアフリカ諸国の多数をあげている。Hla Myint, 1964, p. 36, 邦訳31ページ，Hla Myint, 1971, Ch. 5, 邦訳，第5章。

II 労働の余剰

労働は限界生産力の低い地域から高い地域へ移動するのは当然であるが，一定の地域，具体的には一部族居住地内で，新たに換金作物の栽培を開始するために労働力の一部が割かれるか，あるいは他の地域に労働が移動したのちに，なおその部族社会内で，自給用食糧生産が減少しなかった場合に，労働は「余剰」であったとみなされるであろう。このような事態が生じるために，最も有利な状況は次のような場合である。

(1) 農閑期の利用

アフリカ農業は長い乾季をもつサバナの穀物農業と，塊茎・根茎作物に基礎をおく熱帯雨林の森林ないし森林周辺農業とに大別される。前者は種を播き，後者は塊・根茎を植える。[(2)] 乾季すなわち農閑期が長ければ，それだけ出稼ぎの期間が長くなっても，食糧生産は減少しない。

農業地域から農業地域への短期の労働移動すなわち出稼ぎがなされて，しかも労働移出地域の食糧生産が減少しない状況は，移出地域と移入地域とが気候区が異なり，したがって農作物と農事暦が異なる場合である。農閑期（乾季）の始まった農村から農繁期の他の農村へ出稼ぎに行き，そこでの収穫が終ると，雨季のくる直前に出身村に戻ることができる。具体的にはたとえば西アフリカのサバナ農民が沿岸の雨林気候区の農村へ出稼ぎに行く例があげられる。

ナイジェリア北部のハウサランド (Hausaland) からハウサ (Hausa) 族は，自分たちの主要農作物である落花生とミレット（モロコシ）の収穫が終わると，10月頃からコーラ商人として南下し西部のココア生産地帯，ヨルバランド (Yorubaland) に来て，ここに仕事がみつかればヨルバ (Yoruba) 族のココア農業労働者となり，2月末または3月になると雨季の播種に間に合うようにハウサランドへ戻る。またナイジェリア東南部イボランド (Iboland) の住民は，3月から4月にかけてヤムなどを植付けた後，東部のココア生産地帯に出稼ぎに行く。このようにして，ココアの収穫時には北部（サバナ）から，除草時には南部（熱帯雨林）から季節的労働者の助力を得ることができる。[(3)]

ガーナでは，北部ではミレット，ギニア・コーンおよびヤムが主要作物である。前2者の農繁期は3月末の播種期に始まり，9月の乾季の始まりとともに農閑期となる。他方，ヤムはサバナ気候区に栽培され，早植えは1月から3月にかけて植付けられ，翌年の同じ季節に収穫される。晩植えの場合は，9月から12月にかけて植付け，翌年の同じ季節に収穫される。したがって，ヤム栽培が含まれると，農閑期と農繁期は早植えか晩植えかの農民の選好に依存するが，いずれの場合でも乾季は相対的に暇である。

注(2) Sautter, 1968, p. 4.
(3) Galletti et al., 1956, pp. 208～9.

南部の熱帯雨林気候区での主要食用作物はプランテインとココヤムである。この場合の労働需要は4月から6月にかけて集中し，10月以降は農閑期となる。

他方東南部のココア生産では，新しくココア農園を開く場合には5月から7月までの労働需要が大きく，既設のココア農園の管理と収穫については，収穫期の9月から翌年の1月中期までが最も忙しい。(4)

したがって異なった農耕サイクルをうまく組み合わせると，農村から農村への1年以内の出稼ぎは，出身村内の生産を犠牲にすることなく行なわれることが可能である。

西アフリカではサバナ気候区に人口排出地域が多く，他方沿岸の森林地区は輸出用生産物であるココアとコーヒーの生産が急速に成長するにつれ，労働力不足となった。そのうえに上記の，サバナ内の農閑期と雨林内の農繁期とが一致すれば，移動に要する費用は小さいので，両地域間の労働移動は資源の最適配分達成に貢献する。この型の労働移動に注目し，その効果について最も楽観的な一人は Elliot J. Berg である。彼は，移動労働システムは西アフリカの経済的環境への効率的応用を現わし，それがなかったときよりも，より急速な成長を可能にした，という。彼によれば，出稼ぎ労働は出身村と受入村の両方に利益をもたらす。また彼によれば，アフリカではほとんどすべての農業内の雇用者と，非農業内雇用者の半分は出稼ぎである。西アフリカの多くの地域は出稼ぎ労働者にとって単一の市場を形成しており，その労働の質は同質的不熟練労働で，雇用間に移転が容易で，情報は行きとどき，供給の労働条件に対する相互の弾力性は高い，と彼は積極的にこの型の移動を評価している。(5)

(2) 性別分業

アフリカの農村社会では性別・年齢別の顕著な分業がみられることが多い。

女が出稼ぎに行く例もないことはない。

南アフリカ共和国東 Cape 県 Keiskammahoek 区のコーザ (Xhosa) 族は男女とも出稼ぎに行く。男の45パーセント，女の15パーセントの人口が，ある時点で村に不在であった。女の出稼ぎ人の多くは寡婦か未婚の母で，家族のために食糧を購入する目的で出稼ぎに行く。(6) しかし一般的には出稼ぎ人の大部分は成年男子である。もし村内の自給用食糧生産担当者が女・子供であれば，成年男子が出稼ぎに行っても，村の食糧生産は減少しない。

性別・年齢別分業の事例研究を検討すると，その実態は部族により，また時代によって多様であ

注(4) Beales and Menezes, 1970, pp. 115～6.

(5) Berg, Elliot J., "The Economics of the Migrant Labor System", as Ch. 10, in Kuper, 1965, pp. 160～81.

(6) Wilson, Monica, "Effects on the Xhosa and Nyakyusa of Scarcity of Land", in Biebuyck, 1963, pp. 378～9.

って，一般化は困難なものがある。前記，コーザ族の場合は，輪作を伴わない移動農耕を実施し，農耕は本来女の仕事であり，男は森やブッシュの縁の開墾を手伝う。(7)

タンザニアの南タンガニイカのニャキューサ (Nyakyusa) 族の場合は，山腹に畝立てをし，緑肥を与え，輪作を行なっている。男は重労働であるクワ入れをし，女は植付けと除草を担当している。(8)

ガボン南部の N'Gounié 地区はサバナと森林と両方が存在するが，そこのバンジャビ (Bandjabi) 族の場合は，男の活動はかなり少ない。乾季の数か月間，開墾の仕事をするほか，男は狩猟に出かけ，わなをしかけ，椰子酒を採取するが，大部分の時間は親戚や友達を訪ねるために村内を歩きまわることに使われる。

これに対して，女に属する労働ははるかにきつい。バンジャビ社会は親子関係は母系であるが（子供は母の家系に属する），居住は父系であって，妻は夫の家に住み，夫の村の中では一般的によそ者の地位にある。女は開墾に続く農作業のすべて，すなわち畑の準備，植付け，除草と収穫に従事し，実際上毎日畑で働いている。畑は一般的に村からかなり遠く（歩いて1時間以上），疲労を避けるために農繁期には畑のそばに小屋掛けする。播種と収穫時には働ける女のすべてが村にいないこともしばしばある。

すべての運搬の仕事，魚とり，ゴザ編み，家政一般，すなわち小屋の維持，料理，子供の世話も当然女の仕事である。

少女は水汲み，台所仕事，とくに弟や妹の面倒をみて，母親を助ける。

少年は，おそらく10歳と14歳の間に割礼を受ける。青年は乾季に狩猟をし，近親者の開墾を手伝う以外は，ほとんど生産活動に従事しない。独身者は個人の畑を所有できない。なぜなら厳格に女の仕事である農作業を笑われずにすることはできないからである。結婚は18歳から20歳ぐらいでするが，大部分の時間を村内を歩きまわり，親戚や友人を訪ね，娯楽につぶすことに結婚以前と変わりはない。(9)

コート・ジヴォワールの東北部にある Koulango 区は，伝統的なものが比較的残存している社会をもつ。農業はヤム（仏語・igname），カサヴァ（仏語・manioc），トウモロコシ，落花生の輪作が行なわれている。ここでは唯一の貴い作物とみなされてるヤムを除いて，男はすべての耕作に興味を示さない。(10)

オート・ヴォルタの東部，Gourmantché 地区の Yobri 村の場合には，女は開墾を除くすべての農作業に参加する。なおまた女には専門化された作業があり，播種の際，男は穴をあけ女は種を

注(7) *Ibid.*, p. 375.

(8) *Ibid.*, ニャキューサ族の社会については，吉田昌夫「タンザニア南部のニャキューサ族における村落経済と土地保有慣習の変容」，吉田昌夫，1975，第5章に詳しい。

(9) Jean, 1975, pp. 97～131, Ch. Ⅳ Les Bandjabi.

(10) Couilbaly, 1977, pp. 129～52.

入れる。また収穫の際，男は茎を刈り，女は穂を摘む。あるいは，女は除草のような副次的資格でしか農作業に参加しない。

他方，共同形式で実施される農作業のすべてから女は除外される。

それ以外に，女には特定の仕事，香味料植物すべての栽培，収穫物の運搬がある。

性別分業は，農業に対する補完的な仕事の方が明確であり，商業活動は女，これに対して手工業（職人）活動は男の負担である。(11)

ガンビアの Genieri 村では，男女間により担当する農作物の種類が異なる。男は換金用の落花生と自給用のミレット類を耕作する。女と少女は稲作に従事している。男の栽培する食用作物の収穫量は少なく，村内の総穀物供給の80パーセント（重量）は米に依存するので，相対的に女の労働量は多い。農耕期間でも男は6月と7月に植付と除草労働をすると，10月の収穫まで暇となる。これに反して女はつねに忙しい。女は定常的に1日に6～7時間労働する。つまり換金作物を除く自給農業では，Genieri 村の主役は女である。(12)

先にあげたバンジャビ族のような，森林と南側でサバナ気候区に接している地域のバンツー（Bantu）族では，農業労働がもっぱら女の負担であるのが一般的である。この型の分業発生の理由は，社会の単位がきわめて小さく，政治的に組織されていなかったので，村と家族の防衛が重大な業務であり，これを男が担当したことに見出せる。(13) つまり男は戦士であり，農耕は女にまかせたのである。この事情は，植民地支配が及び，植民本国の強大な武力の前に部族間抗争が終息すると，かつての戦士は余暇をもつようになり，これが出稼ぎと換金作物栽培の労働供給源となったことを説明する。

D. Biebuyck は，アフリカ全般にわたり，農業は厳格な性別分業にもとづいており，これは技術の補完性と関係し，男は森林，女はサバナを耕作する，と記している。(14) しかし一般的にこのことが妥当するか否かは確証できない。

女は家政と育児を担当し，その関係で家から遠くない畑（庭畑）に責任をもち，これに対して男は開墾のような重労働と遠い畑を担当する，という性別分業は，男女の体力差からくる，ありそうな分業ではある。

このほか社会的慣習ないし伝統的価値観よりくる分業がある。これは作業別と栽培植物別の形態をとる。さきに記した Koulango 区内のヤムの生産のみが男によってなされるのは，この例である。バコンゴ（Bakongo）族の農業では，男だけがバナナを栽培することができる。男が落花生を作ったり，クワを使用する土地耕作に従事することは，名誉の失墜とみなされる。多くの場合に，

注(11) Remy, 1967, pp. 60～1.
(12) Haswell, 1953, p. 8, p. 39.
(13) Sautter, 1968, p. 161.
(14) Biebuyck, Part One "Introduction", in Biebuyck, 1963, p. 12.

播種は女の仕事であり，これは受胎と土との関係についての信仰からきているのではないかと想像される。[15]

ナイジェリア北部の Kofyar では，農作業に厳格な性別分業がみられない。クワによる農作業，除草および収穫は男女の共同作業によってなされる。ところが農業以外の作業では，伝統的価値観にもとづく厳格な性別分業があり，これを犯すと村の笑いものとなる。狩猟と鍛冶は男だけが行ない，カゴと壺作りは女だけが行なう。紡糸は男女とも従事するが織布は男の仕事である。また魔術的祭祀は男だけの仕事である。[16]

イボランド内の Afikpo の事例研究によると，主要根菜作物であるヤムは男，カサヴァとココヤムは女によって栽培される。また穀物は女により，米（新しく導入された作物）は両性によって栽培される。男はパームの採集と，川のある村では漁業に従事する。女は上記の農耕のほか，自家用食物の加工と壺作りに従事し，農園と市場との間の財の運搬も分担する。女は一般的に男よりもよく働く。男は祭祀，儀礼に従事し女よりも余暇があるといわれる。[17]

男がもっぱら農作業を担当している事例もある。Bas-Dahomey（ベナン）と Bas-Togo の地域では，女は播種と収穫以外の労働には参加せず，それもできるだけ手早くすませなければならない。畑仕事のほとんどすべては夫の仕事である。もし農産物の収穫が自給用以上に余剰があれば，夫はこれを正妻に売る。彼女はトウモロコシやカサヴァを加工して，市場に持参して販売するのである。[18]

ナイジェリアのヨルバの女もまた，収穫時を除き，畑で働くことはまれである。一般的に換金作物は男の担当であると主張できそうであるが，これにも逆の事例がある。ガボン南部の N'Gounié 地区の Lebamba 村は，サバナに位置し，ここでは自給用の灰色落花生のほかに，換金用の赤色落花生も栽培されているが，ともに女が担当しているのである。[19] しかしこの事例は，農作業のすべてを女が担当しているバンジャビ社会に属するから，ここでの性別分業は他の地域より厳格に維持されているのが，その理由かもしれない。農業の性別分業は，新しい作物が導入されてくるにつれ変化し，その変化への対応の仕方が，部族社会により硬軟の差があるのではないかと考えられる。

性別分業に関して，男の村からの移出，出稼ぎによって村内の自給用食糧生産が減少しない状況があるとすれば，現実に最も高い可能性のあるものは，男の労働力は森林の開墾のような，きつい作業のときのみ需要されるが，自給のための食糧生産の日常の農作業は女が担当している場合である。開墾が毎年行なわれなくてもよければ，出稼ぎの期間はそれだけ延長できる。ただし現実には

注(15) Sautter, 1968, p. 160.
(16) Netting, 1968, pp. 122～7.
(17) Ottenberg, and Phoebe, "Afikpo Markets: 1900-1960", as Ch. 5 in Bohannan, 1962, pp. 119～21.
(18) Sautter, 1968, pp. 160～1.
(19) Jean, 1975, pp. 125～31.

開墾以外にも，農閑期の家や塀の修繕，井戸替のような男の仕事が多少は存在するであろう。したがって男の不在は，たとえ短期では食糧生産に影響がなくても，長期ではこれを低下させることになろう。森林開墾の繁度が低下すれば，これは休閑期間の短縮を意味し，肥沃度の低下が急速となろう。除草時の労働力が不足すれば収穫量の低下をもたらすことは確実である。

(3) 目標産出量

(1)の農閑期の新しい利用と(2)の性別分業による新しい換金作物生産の開始または出稼ぎは，ともに従来の余暇を犠牲にしての労働時間の延長を意味する。社会全体からみれば，アフリカの部族社会内の年間平均労働時間は，先進国内の標準的平均労働時間よりも少ない可能性が大きい。このことは，農民が余暇と，労働によって得られる産出物の効用との選好場において，余暇の選好がつよい結果である。

外部市場から隔離されている自給自足経済内では，食糧の長期貯蔵の困難な事情とあいまって，自給に必要な量に将来の凶作年に備えて，保存の可能な範囲の備蓄量を付加したものが，目標産出量となる。これ以上に生産しても無意味である。[20] 言いかえれば，この社会の農民は target worker の行動をとる。ここでは産出量最大化ではなくて，保障 (security) 確保の原理が作用する。他方，貨幣所得稼得の機会が開かれていれば，ここでは所得最大化の原理が作用するかもしれない。ナイジェリアの Sokoto 社会の事例研究は，このような2原理の並存を示している。[21]

このような状況下にある社会内で，第二原理によって，その社会内に換金作物の生産が，従来の余暇を犠牲にして開始されても，自給用食糧産出量は減少しなくてすむ。もし出稼ぎが非農業地帯＝都市に出れば，その国全体としては，すなわち Lewis=Nurkse 型モデル[22]が機能するためには，残った農村内では，理論的には1人あたり耕地面積が増大するので，技術一定と生産関数1次同次を仮定すれば，残留農民は労働時間を延長しなくてはならない。出稼ぎ先が農村であって，出稼ぎ労働が食糧生産に従事すれば，出身農村内の労働の限界生産力より，出稼ぎ先の農村内のそれは高いであろうから，残留農民は労働時間を延長しなくてすむ。

Nurkse は，人口稠密国内には，農業部門内の偽装失業が多いとみているが，現実はむしろ逆である。人口が定着して以来長い歴史をもつ，周辺の耕地拡大の可能性の少ない，島のような地域では，限られた土地の上に人口を扶養するために，耕して天に至るように，傾斜地にも段々畑が形成され，土地の肥沃度の低下を防ぐために灌漑したり，施肥したり，深耕したり，労働集約的・土地節約的技術を採用することになるので，労働強度は大きく，労働時間は延長される。したがって，

注(20) Allan, 1965, p. 93 参照。

(21) Goddard, "Population Movements and Land Shortages in the Sokoto Close-Settled Zone, Nigeria", as Part II, Ch. IX in Amin, 1974, p. 272.

(22) Lewis, 1954, Nurkse, 1953. 参照。

農民に出稼ぎの機会が開かれても，残留農民が労働時間を延長する余裕はないであろう。

労働時間延長の可能性が大きい社会は，人口希薄国で，従来土地集約的農業を営なみ，労働時間の少なかった社会である。

人口希薄地域で，土地賦存量が無限すなわち未開拓の土地が豊富に存在する社会では，産出量増大にとって，労働賦存量が制約条件となるはずである。自然条件に左右されることの多い熱帯アフリカ農業では，労働需要は季節的に集中する。新しい耕地の開墾のほか，雨季直前の播種，植付け，その後の除草および収穫が労働を集約的に必要とする農作業である。それ以外の季節は労働投入を必要としなくても，一時期の集約的労働投入需要は耕地面積の制約条件となる。ナイジェリア北部で，耕地面積が成人男子あたり1.619ヘクタール（4エーカー），家単位で3.237ヘクタール（8エーカー）が画一的な事実から，Kenneth D. S. Baldwinは，耕地面積の最大限は播種後の除草に必要な労働量の存在いかんによって決定されるのではないかとみている。(23)

開墾についての事例として，ガボン南部の森林地帯のM'Bigouでは，カサヴァの生産は通常7年から15年の休閑をはさんで行なわれているが，休閑の期間は拡張できる土地面積と，そこで利用できる人員に依存している。(24) 休閑期間は長ければ長いほどよいというものではなく，長すぎれば自然の植生により，耕地はもとの森林に戻り，開墾の労働が過重になる。そこで家系の首長は最大限の労働者を適正時期に集めようと努力し，動員可能数は彼の権威の表現でもある。

それにもかかわらず，このような社会から出稼ぎが出るという事実は，労働時間延長の可能性を年間でとり，農業労働の季節性を考慮することによって説明される。

Ⅲ 土地不足

(1) 人口圧力の増大

土地に関する不足の問題をとりあげるに当って，どのような単位を仮定するかが重要である。アフリカの現状からみて，部族社会が適当な単位と思われる。これは共通の言語，共通の文化，共通の政治・経済制度をもつ人々の居住地区である。国全体としては未利用の土地はまだあっても，このような局地的社会内に未利用の可耕地がなくなる点を，土地不足に陥る点と考えよう。

土地不足は何によって起るか。第一はその単位内の人口増加であり，それには自然増加と外部からの移入がある。第二は土地の減少である。部族間抗争による土地収奪，中央および南部アフリカでみられたような白人定着者による土地の収奪すなわち原住民指定地の設定，あるいはまたガーナ

注(23) Baldwin, Kenneth D. S., "Land-Tenure Problems in Relation to Agricultural Development in the Northern Region of Nigeria", in Biebuyck, 1963, p. 76.
(24) Jean, 1975, p. 124.

のヴォルタ (Volta)，ザンビアのカリバ (Kariba) のような，発電のためのダム建設による水没地域よりの住民の強制的移動もまた，同じ結果を生むかもしれない。

ガーナの北部地域内は人口の分布が偏っており，ある地域が居住不可能となった結果，他の地域に人口が集中している。過去何百年かの間，かなりな人口を扶養した多くの地域が，今日では事実上見捨てられている。奴隷狩は60年前に止んだが，その効果は現在に及び，人々が連れ去られたあとの地域は野生動物に侵略され，これはツェツェばえによる病気の感染の大増加をもたらしたので，再入植が困難となった。また，ヴォルタ水系沿いに trypanosomiasis と onchocerciasis (しばしば川めくら病 (river blindness) をおこす) が蔓延した。このため人々は分水界へと移動する他方，牛疫 (rinderpest) の終息は動物の数を大きく増加し，これが人間と土地の使用について競合する。

人口圧力の増大，原始的農耕法，年々の焼畑は，肥沃度を低下させ，土壌の侵蝕とあいまって人々をさらに狭い土地に集中させる。

このような状況が最も深刻なのが，ガーナ北境に近い Zuarungu であり，この土地の居住部族フラフラ (Frafraあるいは Farafara) は，南部への顕著な出稼ぎ部族である。[25] 1954年3月のYeji渡河点での調査では，フラフラは2,506人で，外国人を除けば，そのその数は第1位であった。[26]

一般的に，ある社会内で土地が希少となり，自由財でなくなるにつれ，土地保有制度は共同体保有から私的保有へと移り，土地は譲渡不可能から譲渡可能となり，少なくとも使用権は，賃貸，売買の対象となる。長子相続制の社会では，長子以外は土地の分配にあずかることが困難となり，均等相続制の社会では土地が細分化される。ただし，土地不足への過程は均質的に生じるとは限らない。

第一に，土地は同質ではなく，農耕に有利な土地と不利な土地がある。また特定作物が特定の地質に対応している。同一部族の居住地内に，各種の土地が併存していると，たとえその社会ないし村の内部で未利用の土地がまだ存在していても，優等な土地は希少となる。

第二に，村の構成員もまた同質ではない。インドのカースト制とは異なるが，フランス人はカーストと呼ぶ一種の身分差がある。優等な土地は上位の階層によって所有され，下層階級の者は劣等地が与えられるか，土地不足となる可能性がある。

同一身分であっても，年齢別・性別により，土地保有，農作業に格差があり，たとえば長老は豊富に土地を保有しているが，青年は土地不足という社会も存在する。

これらの事情は，次に述べる土地不足への対応策に関係する。

注(25) Hilton, T. F., "Frafra Resettlement and the Population Problem in Zuarungu", *Bulletin de l'I. F. A. N.*, Tome XXII, sér., B, Nos 3-4, 1960, pp. 427~8.

(26) Rouch, 1956, p. 93, Tableau N°4.

(2) 土地不足の対応策

土地面積を所与として，ある社会に何らかの原因で人口が増加したときの対応策を整理してみよう。

a. 耕地の移動： 社会全体が土地の豊富な地域に移動することがある。人口の例外的に稠密な地域である，ナイジェリア北西部のハウサは，19世紀末以来，未占有の土地を求めて，主として東部へ移動しているし，理由は土地不足以外にもあるが，オート・ヴォルタのモシ (Moshi) 族も同じく拡散している。自発的に村民が新しい土地へ移動する場合もあるし，アフリカ諸国の独立後に，政府が，人口過剰地域より過少地域へ人口を移動する政策をとった例もある。トーゴ北部の Kara 地域からのカビエ (Kabyè) 族とロッソ (Losso) 族の南部への移動，カメルーンの Yabassi と Bafang の間の無人の土地に対する Bamiléké 農民の入植政策[27]，タンザニアのウジャマー (Ujamaa) 村建設政策[28]などが例としてあげられる。

居住地が固定していれば，より劣悪な土地を開墾するか，より遠くの土地を開墾することになる。人口密度がある点にまで達したコート・ジヴォワール東南部の一村，Béttiéの青年は，森の中心部のまったく孤立した土地を開墾する。これは青年にとって，のちに土地所有権を拡張する方法なのである[29]。トーゴのエウェ (Ewé) 族は人口圧力の下に神聖な森を耕作することを決定した。降雨の影響がこの森に依存していたので，この消失は重大な結果を生むかもしれない[30]。

人口増加に応じて耕地を拡張できれば，土地／労働比率は変更しなくてすむ。ただしこの方法には移動するための土地の存在が必要である。未利用の土地が周辺に存在するという事実は局地的には人口圧力が大きくても，より広い範囲をとれば，全体としてはなお土地が不足していないことを意味する。

b. 労働投入量の増加： 労働時間の延長と労働強度の増加が考えられるが，後者は前者に換算されるものとして一括して労働投入量の増加として取り扱うことにしたい。一定の面積の土地に労働投入量を増加してゆけば，労働の限界生産力がゼロに達する点までは，総産出（収穫）量は増加する。

労働投入量の増加は，労働者数を一定として，たとえば年間労働時間の増加によって実現される。あるいは年間労働時間を一定として労働人口を増加してもよい。ナイジェリアの Kofyar では，子供は何歳から働けという指図は受けなくても，年長者をみならって自発的に農作業を始め，10歳で上手に，かつ辛抱づよくクワを使えるようになるという[31]。しかし，アフリカでいくら労働開始の年

注(27) Tcha—Tokey, 1975, pp. 6～9.

(28) ウジャマーについての研究は，日本でもかなりなされているが，ここでは最近のものを1篇だけあげておこう。吉田昌夫，1979.

(29) Sautter, 1968, p. 151.

(30) Jean, 1975, p. 86.

(31) Netting, 1968, p. 183.

齢が若いとはいっても，人口増加はさしあたり年齢構成ピラミッドの底部を増大させるであろうから，労働人口の増加よりも年間あるいは1日の労働時間の延長の可能性が高い。Kofyar について，Netting も，移住地内の生産の増加は総労働力の投入増加にもとづき，それは個人の労働日の延長によるという印象を受けており，それまで農閑期であった1月から3月までの乾季が，農業生産に使用されるようになったことを記している。[32] 従来これらの月の間に行なわれた儀式と狩猟活動は必然的に短縮されている。

耕地面積あたり年間労働投入量が増加すると，労働時間あたり収穫量は減少する，という事実は，E. Boserup の強調するところでもある。[33]

労働投入量の増加は，生産が土地／労働比率の低い活動に移行することを意味する。これは実際には農業技術の変更をともなう。

c. 農業技術の変更： 粗放的農耕から集約的農耕へ移行する代表的な手段は，休閑期間の短縮である。休閑期間を短縮すれば土地の肥沃度は低下する。D. Biebuyck は，このような状況下に陥った農民について，C. White のザンビアの研究を引用し，人々は肥沃度の尽きた土地でのみじめな生存か，少なくとも部分的離村か，農業方法の修正か，の選択をまもなく課される，と記しているが，[34] 第一のものは長期的には「マルサスのわな」が発動して人口増加が阻止されるはずであるから，人口圧力の増加の仮定とは矛盾する。休閑期間を短縮して，収穫量を増加させるためには受動的技術より積極的技術への移行が必要である。その代表的方法は施肥である。

休閑期間を短縮すれば，年間の耕地利用面積は増加するから，総収穫量は増大する。しかし補完的労働の投下も増大する。セネガルの落花生農民は，集約的栽培により耕地の肥沃度が急速に低下することを心得ているから，休閑をはさんだ輪作をするが，[35] もし土地が不足すれば，優先順位にもとづき輪作の方法を変更し，休閑期間を短縮する。セネガルのセレル (Sérèr) 族が東部の落花生地帯に移動定着すると，落花生→ミレット→休閑という輪作を実施する。しかし人口増加により，土地は不足するようになり，生産の選好は落花生におかれているので，しだいに落花生→休閑→落花生という型に移行し，休閑期間も短縮される。[36] これを続行すれば休閑に代わる，肥沃度維持の方法を適用しなければならない。それによって労働あたり収穫量が減少すれば，自給社会において，労働あたり食糧の減少は入手できるカロリー量を減少させ，労働生産性の低下をみちびく。[37]

休閑期間の短縮のほかに，新しい作物の導入による「裏作」の開始も考えられる。さきにあげた Kofyar はこの例であるが，これもまた年間の栽培面積の増加である。面積あたり年間労働投下量

注(32) *Ibid.*, p. 210.
(33) Boserup, 1965, p. 43.
(34) Biebuyck, 1963, p. 28.
(35) Guiraud, 1938, p. 104.
(36) Dubois, 1971, p. 45.
(37) Sautter, 1968, p. 26 参照。

が増大することも自明である。

農業技術の変更は，新しい技術を農民がすでに知っていなければ，実施することができない。E. Boserupは，人口圧力によって新しい技術が生まれたのではなく，技術は知られていたが，人口圧力が増加するまでは採用されなかったと主張をする。たとえば，ヨーロッパ諸国の農業の発達において，人口圧力により輪作が生まれたのではなく，輪作の技術は，他の地域と同様，地中海沿岸諸国では古くから知られていた，という。[38] 彼女は，T. C. Smithの日本農業の研究にもとづき，徳川前半期の人口増大により，動物牽引スキ，二毛作，肥料のための下肥と乾し魚の購入，農書の刊行をあげているが，これは地方的に知られていた技術の普及によるものであって，この時代に発明された技術の結果ではなかったと主張する。

Yobri村の事例でも，施肥によって畑が恒久化される場合，これは新しい方法の発見によるものではなく，既知の，家庭および動物による肥料，すてられた茎と草の焼却による方法の意図的適用である。[39]

人口圧力の下に住民が集約的技術の採用を余儀なくされたのか，それともあらかじめ文明の遺産として集約的技術を所有していたために人口が稠密化したのか，という問題に対して，Sautterはアフリカ全体としては，大部分の場合，人口稠密が技術に先行したように思われる，という意見である。アフリカの人々の多くは，政治的対立により山（reliefs）の中に避難した。そこでは生きるために集約的に耕作しなければならなかった。興味があるのは，Sautterのあげている次の事例である。

山の中で集約的農耕を営んでいたカブレ（Kabré）族は，平和の回復によりトーゴ中央部に移ってきたところ，そこでは土地が不足していないので，より粗放的農業に戻ってしまったのである。[40]

そのうえに移出する農民は多く成年男子である。彼らは働き盛りであるから，その不在が出身村の総生産力に影響しないはずはない。残留農民が老年者，女，子供であれば，たとえ労働時間を延長しても，不在の男子労働を完全に補うことは困難であろう。

移出後に技術進歩が導入されることも理論的には可能であるが，実際には，技術導入の担い手である青年層が不在のため，かえって進歩におくれるのである。

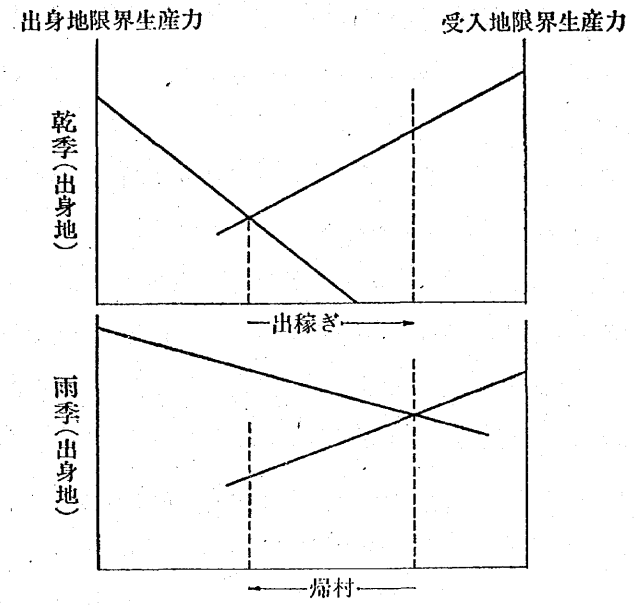
d. 外部よりの食糧購入： 市場が近くに存在すれば，換金作物の生産を行ない，この販売によって得た所得で，外部から食糧を購入する。もちろん，これによって犠牲にされる食糧生産よりも，購入できる食糧の量が多くなくてはならない。おそらく労働の投下の増加が，このために必要であろう。セネガルの新開地に，伝統的食糧のミレットを削減し，換金作物の落花生生産に特化し，輸

注(38) Boserup, 1965, p. 38.
(39) Remy, 1967, p. 37.
(40) Sautter, 1968, p. 26.

入食糧の米を購入する事例がある。[41] 為政者はこの事態を憂慮しているが，落花生輸出，米輸入が比較優位にもとづく国際分業の型であるかもしれない。ただしこの場合は，土地は余剰生産要素ではない。

e. 出稼ぎ： 出稼ぎ先もまた農村であれば，労働の限界生産力の低い地域より高い地域への労働の移動とみられる。もしこれが出身農村の乾季にだけなされ，雨季の開始前までに出稼ぎより確実に戻るならば，労働の限界生産力格差が両地域間に季節的に逆転していることによって説明される。完全な季節的労働移動のモデルは第1図のように図示される。

第1図 季節的労働移動



移動先での就職先が農村内の非農業あるいは，農業が存在しない部門として定義された都市であっても，出身地と受入地間の労働の限界生産力格差によって移動を説明できる。移動先が都市であれば，地域間の農事暦のサイクルの差にもとづく説明は，いくらか適用しにくくなる。最近，労働移動が出稼ぎではなくて長期化しているが，その理由は，年間を通じての両地域間の労働の限界生産力格差に求められる。逆に，このような格差がつねに存在するにもかかわらず，アフリカでは人々が出稼ぎ先とくに都市に定着せず，帰村の意志を捨てないことも，今日なおアフリカの労働移動の特徴である。この説明のためには別の理由が必要である。

農村内には貨幣（現金）稼得の機会のない場合が，この理由となる。自然および経済的環境の不確実さは，農民に家族のための食糧生産と，貨幣所得稼得のための労働を区別させることについてはすでに記した。[42] このような二つの原理が作用すれば，たとえ人口圧力がつよくなくても農民は出

注(41) 矢内原勝，1978年，「三田学会雑誌」参照。
(42) Goddard, *op. cit.*, in, Amin, 1974, p. 272.

稼ぎに行くし，また帰村する。

移転先が都市の場合，移転者の出身地は，農業条件のきびしい農村地域ばかりでなく，労働受入れ地域の農村も含まれる。都市内で失業ないし非組織部門内に滞留している移入民は，土地のない小農ではない。イギリスの19世紀の資本主義発展期に都市へ移動した人々は，囲い込み運動等により，土地を喪失し，自分の労働力以外に販売するものがなくなった農村の人々であった。他方，産業革命により都市工業は労働力を需要したが，その賃金も生活条件も，農村の人々にとって魅力的ではなかった。[43] 彼らは農村では生活できなくなったので，やむを得ず都市労働者となった。つまりこの型の労働移動には排出要因がつよかった。

これに反してアフリカの，とくに都市への移動者は，その出身地自体が労働吸引地域である，先進農村よりも出てくる。彼らは故郷に土地が不足しているわけでもなく，極貧家計からでもなく，むしろ生活に余裕のある村内では教育水準の高い階層に属する。都市に行っても，とりあえずは非組織部門に留まらなければならないことも心得ている。つまり情報が不足しているわけではなく，失業を覚悟して都市に出てくるので，出身地の排出要因よりも，都市の吸引要因がつよい。

そこでこの種の移動の要因としては，部門内に就職が成功した場合の比較的高給をとれるという経済的要因以外に，都市の提供する娯楽，つまり映画館，バー，電灯のきらめく夜の世界，病院と学校と水道，[44] 都市での賃金労働者としての生活経験が，帰村したうえでの結婚について有利なこと，直接的に婚資の稼得，婚約者への贈り物の入手などがある。

これらの要因は「都市ギラキラ（the Lure or Bright Lights）仮説」と私が呼ぶ，都市の非経済的吸引力であるが，また排出地域内にも，長老の権威に対する若者の反抗のような，非経済的排出原因もみられる。

現実の出稼ぎには，このような心理的・社会的要因も多く含まれている。

Ⅳ 農民の選択

一定の可耕地面積内で人口が増加した農民にとって，aからeまでの対応策が開かれていれば，そのうちのどれかを選択すればよい。Boserup仮説によれば，人口が増加すると，農業技術進歩が生じるはずである。ところがオート・ヴォルタのモシ族社会でも，ウガンダ北部からザイール北東部にまたがって居住するアルール（Alur）族社会でも，農業技術は停滞していた。セネガルのセレル族社会内への新しい技術の導入は，独立後にとられた，政府の奨励があずかっている。

注(43) Elkan, "Migrant Labour in Africa, : an Economist Approach", as Ch. 25 in McEwan and Sutcliffe, 1965, p. 287.

(44) 出身地では水汲のため，何百メートルかを井戸まで歩かなければならない Riddell, 1978, p. 244 参照。

農民が技術を変更しなかった理由は，それが労働時間の延長か労働強度の増加か，その両方をともなうので，これ以外の対応策を採用したからであろう。農民がeの出稼ぎを採用したならば，出稼ぎが農閑期に行なわれれば，年間を通じての労働時間の延長となる。しかし農繁期の労働時間と強度は，出稼ぎ先のそれらよりも苛酷であったので，彼らは出稼ぎを選好したと思われる。

モシ社会は，食糧自給用のミレットの生産が許容し得る範囲以上に人口が稠密であるといわれる。モシ社会のような気候条件のきびしいサバナ地区内で伝統的農業を営んでいるこのような社会が，技術停滞の下に食糧生産が不足傾向にあっても，「マルサスのわな」を脱して人口が増加したのは，出稼ぎの道が開かれていたからではないかと推定される。受動的農業技術に依存する伝統的農業は天候に左右されるから，豊作，不作に交互にみまわれる。「マルサスのわな」が発動するはずの不作の年を，出稼ぎによってかわせば，また故郷に戻ってくる。人口圧力によって出稼ぎをするというよりも，出稼ぎする道が開かれていたから，人口がギリギリの線まで増加した，という論理によって，自然条件のきびしい地域内の社会に，人口が多い事実が説明されるであろう。

aの全社会の新しい土地への移動を除いて，bからeまでは，労働投下量の増大を要求する。労働時間なり，労働強度の増大が可能であったし，今日でも可能であるという意味で，アフリカにはなお労働は余剰である。同様に，まだ未開拓地が存在するし，また農業技術の修正により，土地生産力の大幅な増加が期待できるという意味で，土地は豊富である。土地が不足してくる以前に，その他の要因による農民のaからeまでのいずれかの選択が可能であることはもちろんである。

<参考文献>

Allan, William, *The African Husbandman*, Oliver & Boyd, Edinburgh and London, 1965.

Amin, Samir (ed.), *Modern Migrations in Western Africa*, Oxford University Press, London, 1974.

Baldwin, Kenneth D. S., "Land-Tenure Problems in Relation to Agricultural Development in the Northern Region of Nigeria", as Ch 1 in Biebuyck, 1963.

Beales, Ralph E. and Menezes, Carmen F., "Migrant Labour and Agricultural Output in Ghana", *Oxford Economic Papers*, Vol. 22, No. 1 (March 1970).

Berg, Elliot J., "The Economics of the Migrant Labor System", as Ch. 10 in Kuper, 1965.

Biebuyck, Daniel (ed.), *African Agrarian System*, Oxford University Press, London, 1963.

Bohannan, Paul and Dalton, George (eds.), *Markets in Africa*, Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1962.

Boserup, Ester, *The Conditions of Agricultural Growth: The Economics of Agrarian Change under Population Pressure*, George Allen & Unwin, London, 1965.

Coulibaly, Sinali, "Les champs en éventail en Côte d'Ivoire", *Les Cahiers d'Outre-mer*, N°. 118, 30e année (avril-juin 1977).

Dubois, Jean-Paul, *L'Emigration des Serer vers la zone arachidière: Contribution à l'étude de la*

colonisation agricole des Terres Neuves au Sénégal, ORSTOM, Dakar, 1971.

Elkan, Walter, "Migrand Labour in Africa: An Economist's Approach", as Ch 25 in McEwan and Sutcliffe, 1965.

Galletti, R., Baldwin, K. D. S. and Dina, I. O., *Nigerian Cocoa Farmers: An Economic Survey of Yoruba Cocoa-Farming Families*, Oxford University Press, London, 1956.

Goddard, A. D., "Populatin Movements and Land Shortages in the Sokoto Close-Settled Zone, Nigeria", as Ch. XI in Amin, 1974.

Guiraud, Xavier, *L'Arachide sénégalaise*, Librairie Technique et Economique, Paris, 1938.

Haswell, M. R., *Economics of Agriculture in a Savannah Village: Report on Three Years Study in Genieri Village and Its Lands, the Gambia*, Her Majesty's Stationery Office for the Colonial Office, London, 1953.

Hla Myint, *The Economics of the Developing Countries*, Hutchinson, London, 1964. 結城司郎次・木村修三訳『低開発国の経済学』鹿島研究所出版会，1965.

———, *Economic Theory and the Underdeveloped Countries*, Oxford University Press, London, 1971. 渡辺利夫・小島真・高梨和紘・高橋宏訳『低開発国の経済理論』東洋経済新報社，1973.

Hilton, T. E., "Frafra Resettlement and the Population Problem in Zuarungu", *Bulletin de l'I. F. A. N.*, Tome XXII, sér. B, N°s. 3-4, 1960.

Jean, Suzanne, *Les jacheres en Afrique tropicale: Interprétation technique et foncière*, Institut d'Ethnologie-Musée de l'Homme, Paris, 1975.

Kuper, Hilda (ed.), *Urbanization and Migration in West Africa*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1965.

Lewis, W. A., "Economic Development with Unlimited Supplies of Labour", *The Manchester School of Economic and Social Studies*, Vol. 22, No. 2 (May 1954).

McEwan, J. M. and Sutcliffe, Robert B. (eds.), *The Study of Africa*, Methuen, London, 1965.

Netting, Robert McC., *Hill Farmers of Nigeria: Cultural Ecology of the Kofyar of the Jos Plateau*, University of Washington Press, Seattle and London, 1968.

Nurkse, Ragnar, *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries*, Basil Blackwell, Oxford, 1953. 土屋六郎訳『後進諸国の資本形成』巌松堂出版，1966.

Ottenberg, Simon and Phoebe, "Afikpo Markets: 1900-1960", as Ch. 5, Bohannan and Dalton, 1962.

Remy, Gérard, *Yobri (Haute-Volta)*, Mouton, Paris, 1967.

Richards, A. I., "The Problem and the Methodes", as Ch. 1 in Richards, 1973.

Richards, A. I. (ed.), *Economic Development and Tribal Change: A Study of Immigrant Labour in Buganda*, Oxford University Press, Nairobi, 1973.

Riddell, J. Barry, "The Migration to the Cities of West Africa: Some Policy Considerations", *The Journal of Modern African Studies*, Vol. 16, No. 2 (1978).

Rouch, Jean, "Migrations au Ghana (Gold Coast) (Enquête 1953-1955)", *Journal de la Société des Africanistes*, Tome XXVI—Fascicule I et II, 1956.

Sautter, Gilles, *Les structures agraires en Afrique tropicale*, Centre de Documentation Universitaire, Les Cours de la Sorbonne, Paris, 1968.

Tcha-Tokey, Jato Boussounam, *Migration et dévéloppement (Le cas des Kabyè et Losso au Togo)*,

Université de Yaoundé, Yaoundé, 1975.

Wilson, Monica, "Effects of the Xhosa and Nyakyusa of Scarcity of Land", as Ch. XIX in Biebuyck, 1963.

矢内原勝(1)「セネガルの落花生生産・輸出の成長要因」,『三田学会雑誌』, 71巻2号 (1978年4月)。

————(2)「発展途上国の労働移動：アフリカの農村から都市への移動」『世界経済評論』; 22巻9号 (1978年9月)。

吉田昌夫「タンザニア南部のニャキューサ族における村落経済と土地保有慣習の変容」, 1975, 第5章。

————編『アフリカ農業と土地保有』アジア経済研究所, 1975年。

————「タンザニアにおける「社会主義」的農村開発政策と小農輸出経済」『経済研究』, 30巻2号 (1979年4月)。

(経済学部教授)